

京都カーストは本当に存在するのか

「京都カースト」ってご存じですか？

京都人どうしの会話で、「北区？へえ、えらい寒いところから来はってんなあゝ」のような、京都人の中にぼんやりと存在するエリア（この場合は区）に対する階級意識のことです。そして「京都カースト」という言葉は以前からインターネット上などで存在していました。

私も Kyoto Love. Kyoto 編集部は「京都カースト」という概念を意味がないものと感じ、否定する立場でございます。その上で、各エリア（区）の特徴を1人でも多くの方に知っていただきたという想いで本書を企画出版しました。

また、「京都カースト」という概念をいつかは無くしたい、無くすべきだと思っております。その

ためにも、まずは多くの方に「京都カースト」を知っていただく必要があります、タイトルに入れました。これは編集部への信念に基づいたものであり、差別を助長するような意味合いや単なる煽りではありません。

私は2024年に「西京極から見た京都カースト」京都カーストは本当に存在するのか」というWEB記事を公開しました。それは、「京都カースト」というぼんやりと、しかし確実に存在する事象を明るみに出すためでした。こんな嫌なものは、白日の下に晒してとちめてやりたいと思っていました。このモンスター（京都カースト）を退治するためには、その名前を確定させる必要があります。その名前こそが「京都カースト」なのです。

西京極記事の公開後、非常に大きな反響がありました。そこで、「他のエリアの視点から見た京都カーストとは何なのか？」を考える機会を作ることには大きな意義があると思い、「ぜひとも京都市の11行政区の『目』を揃えよう」と思ったのが本書発刊のきっかけです。これまでの編集で培った人脈を生かし、11行政区それぞれの立場から語るにふさわしい熱意のある方々に執筆をお願いしました。

また、「京都カースト」という事象がなぜ存在するのか、についても思うところがございます。明治元年9月20日、明治天皇は建礼門から京都御所を出て東京に向かわれました。その後、いったん京都にお戻りになった後、再び東京行幸の旅に出られます。そして、1869（明治2）年に明治天皇は東京に留まられることになり、新たな都が東京と定められました。京都は蛤御門の変で市街が焼失し、首都機能を失い、大きな打撃を受けていました。そのため、そのまま大きく衰退するかと思われたものの、日本初の小学校の開校、琵琶湖疏水の建設、日本初の電気による路面電車の開業、内国勧業博覧会開催など多方面で先駆的な事業に取り組むことで、京都は再び活気を取り戻します。そのおかげで、京都は今でも都市として存在していますが、「都」でなくなったこと「天皇さんがお戻りにならないこと」に対しては大きな喪失感を抱えたままです。この感情と洛中にこだわる気持ち、京都カーストという概念を生み出したのではないのでしょうか。洛中こそが、かつては日本の中心であり、千年の都であった。その証を求めているがゆえに、京都カーストにこだわるのではないかと私は考えています。

京都市の中でもごく一部の限られたエリアこそが、本物の「京都」であるという暗黙の共通認識を持つ人々が存在します。そのエリアとは、いわゆる「洛中洛外」^{らくちゅうらくがい}における「洛中」です。この「洛

中洛外」という概念を軸として、エリアごとに暗黙の階級意識が存在するのです。それこそが、本書で扱うところの「京都カースト」です。そして、この問題に表立って触れることは、長らくタブーとされてきました。

この「洛中」というエリアの範囲については、さまざまな説や見解が存在するため、明確に定まっているわけではありません。また、たとえ洛中の町家に住む老舗の資産家であっても、「この辺りは人が多うて難儀ですわ」などと言って、きつと謙遜なさるでしょう。つまり、洛中に住んでいるからといって、他の地域の人に対してあからさまに自慢したり、威張ったりしないのが京都人なのです。

「京都人」とは、単に今京都に住んでいる人というよりも「幼いころから京都で生活したゆえに、多感な子供時代に京都カーストにおびやかされ、微妙なバランス感覚を身につけて大人になった人」なのではないかと考えています。一般的にカースト上位と見なされる上京区や下京区であっても、他のエリアであっても、ことごとくその感覚に苛まれてきたのではないのでしょうか。

たとえば、上京区は洛中にありカーストの上位に位置すると一般的に認識されています。しかし、

天皇が不在の「空つぼの御所」を、いつお戻りになるとも知れずお守りするのは、どのような気持ちなのでしょう。洛中であればあるほどに、洛外には思いもよらないような心情もあるのかも知れません。京都内にとどまらず、「東京」への対抗意識もあるでしょう。このように程度の差はあれども、京都人の心の奥底には「京都カースト」への意識があるように思います。しかし、それを言葉に発するのは憚られてきました。

本書の目的は、京都人のありのままの想いを知っていただき、それぞれの行政区の特徴や良さを伝えることにあります。それは、地域ごとの多様性を理解していただくことを意味します。決して、格付けランキングを行うものでも、「いけず」という言葉に象徴されるように、京都人にレッテルを貼るものでもありません。

本書の編集、そして自身の執筆を通じて、京都人の根っこを知るほどに、京都という土地、そして京都人を愛おしく感じています。本書を通して、京都の個性と魅力が伝わり、京都を愛する人が増えることを心から願っています。

いま、私たちは時代の過渡期に來ていると思います。

10年後、100年後にはきっと「京都カースト」は消滅しているでしょう。いえ、無くさなくてはいいけません。そのために、今、「京都の意識」を変えたいのです。この本は、その一歩になるものだと考えております。